

## 北欧から見た北海道経済

経済学部では、専門の枠を超えた教員間の研究交流を目的として「耳学問の会」という集まりがもたれています。今回の話題提供者は、昨年ノルウェーに留学された奥田仁先生でした。その模様をご紹介します。

奥田／それでは、「北欧から見た北海道経済」というテーマでお話しさせていただきます。

### 北海道経済の問題点

北海道経済はいま大きな問題を抱えています。次の3つが重要です。第1は、産業構造の大きな歪みです。つまり、工業の非常な低位と建設業肥大化です。第2は、域際収支の大きな赤字を政府資金の流入によって資金的に賄っているという構造です。第3は、他の地域に比べて特別激しい過疎化の進展です。

### 過疎問題は地域政策の帰結

今回ノルウェーへ行って一番気になったのがこの過疎問題でした。資料を調べてみると、小さな市町村のレベルでは人口減少があるのですが、北海道の支庁に相当するカウンティのレベルでは、ほとんど人口を減らしていません。北海道では、石狩と十勝以外は全て人口を減らしています。このことが非常に印象的でした。そこで、その理由を尋ねると、誰もが「政策の問題だ」と明快に答えていました。政策的な条件によってはじめて過疎化の進展はくい止めることができるんだということです。

### 「小」地域政策と「大」地域政策

その政策に関してノルウェーでは、「小」地域政策と「大」地域政策という議論が起きています。「小」地域政策というのは、私たちがふつう地域政策と言っているもので、「このような地域を作っていく」という、いわば意図された地域政策です。しかし地域を見る場合、「大」地域政策、つまり本来地域政策として立案されたものではない諸政策の総体が地域に及ぼす影響が非常に重大だという反省が生れてきたのです。

### 福祉・教育・農業政策・地方自治は大事な定住条件

特に社会福祉や社会保障に関する政策が、地域社会の定住条件にとって決定的に重要な役割を果たしています。教育も重要です。ノルウェーの人口は北海道とほぼ同じですが、26の国立の高等教育機関が各地域に配置されています。これが地域の人口減少を食い止め、地域社会と経済を支える役割を果たしています。もうひとつ重要なのが農業政策です。ノルウェーの農業補助金の率は日本と同様に高いのですが、条件不利地域や小規模農家に傾斜的に補助金を与える政策を徹底しています。非常に小規模な農家でも、補助金によってそれなりに経営が成り立っているのです。それができるのは、地域の文化と景観を維持するという社会的な合意があるからです。それから、自治の伝統、地方選挙および国政選挙における比例代表制にも強い印象を持ちました。

### 新しい地域発展政策の試み

いま北欧では、地域発展政策でもさまざまな新しい試みが見られます。北海道でも取り組まれている産業クラスターはフィンランドを直接の事例としています。また、北欧はそれぞれ小国で、北海道と同じくらいの経済規模ですが、こうした小国地域における在来産業——家具、繊維、衣服、雑貨、食品工業など——の高度化を重視する議論がなされています。私がいくつか訪ねた所でも、人件費は世界一高く、市場の中心地からも距離があり、原料面でも決して有利ではない条件のもとで、地域優位性を獲得している分野がかなり見られました。



**奥田 仁** 北海学園大学  
経済学部教授

**研究テーマ** EU周辺諸地域と北海道の比較研究  
『農業雇用と地域労働市場』北海道大学図書刊行会  
(岩崎徹編著・1997年)  
**主要著作** 『地域経済発展と労働市場』日本経済評論社  
(奥田仁著・2000年)、他論文多数

## 「大」地域政策という発想



**小坂**／「大」地域政策と「小」地域政策との関連をもう少し分かりやすく教えていただけませんか。

**奥田**／「小」地域政策とは、例えば地域に工業団地を作るとか、地域での投資に補助金を与えるなど、明かに地域を対象とした政策のことです。ところが

近年、地域政策としては全く意図されていなかった政策が、地域のあり方に非常に大きな影響を与えているということが議論されるようになりました。すべての公共政策は必ず地域に影響を及ぼしていく、この側面に注目して、それらを「大」地域政策と言うわけです。特に北欧の場合には、雇用の場としても、生活環境の充実という面でも社会福祉が非常に大きな役割を果たしており、地域社会に人々が住み続けられる条件になっています。また、学校や病院などの公共機関をいろいろな地域に分散配置しています。立地配置にまでそういう配慮が働いていて、それらが全体として地域の定住条件の基礎になっている。そういう政策が、過疎化を防いでいると考えられるわけです。

**小坂**／要するに「大」地域政策とは、ノルウェー政府が社会保障や社会福祉関係の施設を十分に展開できるような福祉政策を行っているということですか。

**奥田**／「大」地域政策とは立地配置のことだけをいうのではありません。国民所得の約5割を公的な支出が占めている中で、福祉体制全体がそういう役割を果たしているわけです。

## 社会福祉・社会保障は重要な地域政策

**小坂**／「小」地域政策は意識的な地域政策であって、「大」地域政策の方は、なにか結果としてそうなってしまっているというような消極的な意味に聞こえたのですが、そうではなくて意図された地域政策(＝「小」地域政策)はむしろ限定された政策であり、本当に重要なのは「大」地域政策の方である。ノルウェー政府として、どの地域に住んでいても社会福祉を保障するような仕組みを作ろうとしているということでしょうか。

**奥田**／まさしくその通りだと思います。

**山田(誠)**／ナショナルミニマムが行き届いているということなんでしょうか。日本の場合ですと、北海道は東京のお金で食べているといった議論がされますが、ノルウェーでは、負担と恩恵についてのこの種の議論はないということなんでしょうか。

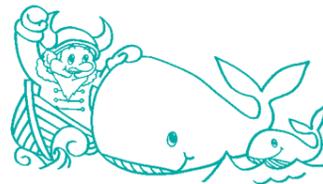
**小田**／しかし、なぜそれを「大」と「小」の地域政策に分けて呼ばねばならないのでしょうか。その区別の指標は何でしょうか。

**伊藤**／こういうことではないでしょうか。たとえば年金などは全国レベルで決められるもので、どの地域でも同じです。それから医療は中地域です。日本では都道府県レベルでやっています。そして、子供や老人、女性を含むすべての人のための細かな福祉が一番小さい自治体でやる。一番大事なのはそのレベルの社会福祉ですから、そこの住民が徹底した議論をやらないと良い福祉にならない。その意味で、自分たちの町でどのような福祉を実現するかは、地域政策の一番の根幹ではないでしょうか。たまたま私のゼミでスウェーデンのことをやっているんですが、スウェーデンでは9.5人に1人が公務員です。そのほとんどは自治体レベルの公務員で、しかも多くが医療や福祉などの現業に携わっています。また、行政機関も企業者意識を持っていて、次の選挙で勝つためにサービスの開拓には真剣です。でも、その財源についてはまだうまく説明できないところがあります。

**小田**／結局、国民負担率の地域的相違の問題からの区分でしようか。

## ●●●ノルウェー王国●●●

ヨーロッパの北西はずれに位置する立憲君主制国。国名には「北への道」という意味があり、北はバレンツ海、西はノルウェー海、南は北海に囲まれています。東はスウェーデン、フィンランド、ロシアと国境を接しています。地域によって寒暖の差が激しく、海岸線は内陸へ最大で200キロも入り込んだフィヨルド(峡湾)を形成しています。



- 政体 立憲君主制
- 国土面積 385,364平方キロメートル
- 総人口 約450万人
- 通貨単位 ノルウェークローネ(NOK)
- 首都 オスロ(Oslo)

西暦800年ごろから1000年ごろまでは「ヴァイキング時代」と呼ばれ、ノルウェー史の中でも特に活気にあふれた時代でした。現在、国連と西側諸国の安全保障同盟であるNATO(北大西洋条約機構)に加盟。1960年代の終わりに、ノルウェー沖で大規模な海底油田と天然ガス田が発見され、ノルウェー経済に大きな影響を与え、近代福祉国家、先進工業国として大きく発展しました。捕鯨国としても有名です。



**伊藤**／負担率の他に還元率の問題があります。負担したのに対して何パーセントが還元されているかをみると、スウェーデンは70%です。だから安心して出しますよね。それに対して

日本は50%、つまり社会保障給付として戻ってくる率が非常に少ないわけです。

**森下**／財源の問題で言うと、ノルウェーの場合、豊富な石油資源や安価な電力の存在が決定的に重要な意味を持っていますか。

**奥田**／1990年代のスウェーデンやフィンランドが財政的な理由で福祉政策をある程度後退させざるを得なかった時期に、ノルウェーだけはそうせずにすみました。それから、先ほどの農業補助金もスウェーデンやフィンランドなどでは削減されたわけですが、ノルウェーは手厚いまま維持しています。その背景には、石油収入があると思います。

## 農業保護をめぐる国民的合意の違い

**細見**／しかし、そういう財政的余裕があるとしても、重要なのは農業保護に関する国民的合意の中身ではないかと思えます。単なる経済活動としてではなく、文化的景観の保持などの面からも農業を捉えるかどうかの違いがノルウェーと日本にはあると思うのですが。

**奥田**／そう思います。ある学会のエクスカージョンで山奥の農村に行きました。その村長さんは、オスロの農業大学の大学院を出たのち帰農した人物です。彼はこう言っていました。「自分の農業収入は1時間あたり800円ほどだが、他の仕事をすればその倍以上は稼げる。農業をやっているのは金勘定からではなく、2000年に及ぶ地域の農村文化を守りたいからだ」と。他方スウェーデンではかなり農業補助金を切りました。そのために、かつての農地が藪地や灌木林みたいになりました。そうせずにすんだという点で、ノルウェーの石油収入は大きな役割を果たしたと思います。

**小林**／田舎に人がとどまる理由についてですが、先祖代々そこに住んできた土地を離れることは文化的アイデンティティを失うことになるという土着意識が強くあって、そういう意識に政策的な面がプラスされているということではないかと思えますがどうでしょうか。そういう面での北海道とノルウェーの違いに興味があります。

**奥田**／北欧の場合、先程小林先生がおっしゃった愛郷意識は非常に強いと思います。オスロなどの大都市に住んでいる住民の25~30%がサマーハウスを持っていますが、その多くが自分の祖先の出身地にそれを持っていて、今でも年に一度は自分の出身地の農村に帰るわけです。自分の出身地との結びつきを、今も都市住民が保持し続けているわけです。このような愛郷意識がさっき言った農業保護への国民的コンセンサスにつながっています。

## 地域経済と教育の役割

**竹田**／地域経済にとっての教育の役割についてですが、地域と大学の関係には二つの側面があって、一つは、そこにいる若者が流出しない、あるいは外から流入してくるという側面です。もう一つは、そこでどういう人材が養成され、地域経済に

どう貢献するかという面です。イギリスの北アイルランドの場合、地域ごとに全学部を置くんですね。ノルウェーでは、各地域に国立大学を作る場合、地域の全般的な教養のアップを目指して同じような学部構成をもつ総合大学が設けられているのでしょうか、それとも、各地域の伝統的な産業と結びついたかたちでの学部構成がとられているのでしょうか。



**奥田**／私はワンセット主義という印象を強く持っています。もちろん人口450万のところで26校ですから、すべてがワンセットというわけにはいきませんが、しかし必ずどこにも理系の学部を置いています。どちらかと言えば、全ての地域住民にできるだけ高い教育機会を与えることが主たる目標ではないかという印象を受けてきました。

## 新しい地域発展政策の模索

**小林**／先ほどの農業政策についてですが、それは、福祉政策と同様に、結局広い意味での社会政策ですよね。北海道の公共事業も産業政策というよりは社会政策でしょう。そういう意味では、ノルウェーの地域を支えているのは、その産業を成長させていくという政策ではないのではないかという印象を受けるのですが。

**奥田**／まさにそうです。ノルウェーの場合には石油収入があるために、1920年代の労農同盟でできた福祉政策の枠組みがそのまま生き残りました。ですから、例外はありますが、地域発展政策という議論は必ずしも活発ではないわけです。社会政策である程度基準が満たされており、人口流出率もスウェーデンなどよりも低いので。もちろん、先ほど述べたように、世界的な家具工業が発展しているという事例もありますが、どちらかというと、社会政策に強く依存している性格がノルウェーは強いですね。しかし同じ北欧でも、特にデンマークなどでは、産業開発が非常に盛んになっています。格差は正を社会政策的な手法によってではなくて、地域の産業・経済発展によって実現しようという方向に、急速に傾斜してきているという印象を受けます。これには、EUの地域政策全体が、近年そちらへの傾斜を強めていることも影響していますが、北欧の中でも財政的に相対的に厳しいところとノルウェーとでは重点の置きかたが違って、デンマークなどでは後者のウエイトが高くなってきているようです。

**小田**／「環境国家」「福祉国家」を掲げている北欧諸国では、国家政策は同時に地域政策・地域システム作りとなってきている。例えば、エネルギー自給政策・産業立地政策・廃棄物処理政策は「完全リサイクル社会」づくりの中で効果を発揮する。すなわち、産業政策→畜産→畜産廃棄物→メタンガス→ガス・電力会社進出→安価な有機肥料・燃料・電力(廃棄物ゼロ社会)→工場進出→雇用増→住宅団地・人口増→農工業の発展→安定的な都市作り→国家財政の安定化→環境・福祉国家の発展というような図式です。わが国の場合の「地域政策」も異なった方向からの接近、いわば、「循環型地域政策」への転換を大胆に試みる必要があるのではないのでしょうか。

**司会**／まだまだ議論は尽きないようですが、そろそろ時間ですので、今回の耳学問の会はひとまずここで終わりたいと思います。

(この研究発表は7月4日、学内で行われました。)

# 講義紹介

## 経済政策(1部)

浅妻 裕



**司会**／浅妻先生は今年の4月に本学に赴任されたばかりですね。まず講義の概要をご紹介ください。

**浅妻**／経済政策は対象領域が大きいので、特に重要な政策に絞って講義を行っています。前期の前半では、イントロダクション的な意味も含めて、戦後日本経済の発展を経済政策の展開と絡めて概説しました。それから次第に領域を絞って、今は環境政策や地域政策に関する講義をしています。一見、経済政策とは無関係に思われるかもしれませんが、例えば環境政策には、環境保全的な経済活動には補助金を与えたり減免税を行ったり、そうでない経済活動には逆に税金をかけるなどの手段がありますが、そういった手段を通して経済活動をコントロールしていくことができます。逆に言えば、経済政策も環境保全を念頭に置かざるをえなくなっているということです。いずれにしろ、時代状況から見て特に重要だと思われる政策課題について講義しています。

**司会**／浅妻先生の講義を聞いて、印象に残っていることは何ですか。

**学生A**／バブル経済の発生のメカニズムに関する説明が印象に残りました。現在の不況につながる話だったのでおもしろかったです。

**学生B**／「バブルがはじけた」と言われても、実はあまりピンとこないんですが。

**司会**／皆さんが物心ついたときはもう不況のまっただ中だから、この状態が当たり前だという気持ちはありますよね。

**浅妻**／バブルのところは、かなり重点的にやりました。アンケートをとってしてみると、高校の政経の教科書で言葉だけは知っているけれど、そのメカニズムまでは知らなかったというような意見もいくつかでていましたね。

**学生C**／僕は、現代の時事問題に関連して考えられるところが印象に残っています。公共事業改革についての講義が特におもしろかったです。公共事業の効率が悪くなっているという話などを聴くと、税金が無駄に使われているなどという気がします。

**学生B**／私は、環境問題に関連していろいろな事例を挙げて説明してくれるので興味がわきます。

**浅妻**／東京江東区での公害被害や、自動車公害の話などもしましたね。もっともまだ十分ではありませんが。

**学生D**／僕も、環境の貨幣的評価の話がおもしろかったです。ふだんなにげなく使っている空気や水に価値をつけて評価していくというもので、おもしろいなと思いました。

**浅妻**／皆さんの話を聞くと、やはり現在の日本が直面している問題と関連した項目についての関心が高いような気がします。また、とくにそのあたりは私も重点的に講義をした箇所ですので、このようなリアクションがあるとうれしいです。

**学生C**／先生は去年一年間は東京で非常勤講師をなさっていたということですが、なにか違いを感じられますか。

**浅妻**／こちらに来て一番驚いたのは、学生が非常にまじめであるということです。東京では私立の工学系の学生を教えていたので、彼らの専門と私の講義に乖離があったからかもしれませんが、こちらではまず講義への出席率がよいと感じました。また、最近は質問もたくさん受けるようになってきて、やりがいを感じます。その態度が、講義内容の理解や、学問的な好奇心を高めることにつながっているかどうかは別ですけどね(笑)。

**学生D**／新任ならではの苦労はありますか。

(テーマ)

●経済政策の目的や手段をふまえた上で、戦後日本の経済発展において経済政策が果たした役割と、現在直面している諸問題について考察する

●環境と経済の政策統合の課題について考察する

●都市・地域の発展と経済政策の関連について考察する



**浅妻**／講義の時間配分が難しいです。この項目ではこれを教えたいということとはたくさんあるのですが…。要点をしぼって教えねばならないと思います。

**学生A**／先生が講義を通して学生にもっとも伝えたいことは何ですか。

**浅妻**／講義を通して一番理解してほしいことは、それぞれの政策の背景には経済主体の複雑な利害関係が絡まっているということです。意見のあったバブル経済のメカニズムの講義などではかなり意識しましたが、図などを用いながら、そのあたりの利害関係をときほぐして理解してもらうような講義をめざしています。また、例えばこの前話した環境税のことにに関してであれば、理論の上では環境を悪化させる生産活動に課税した方が社会全体からみれば望ましいということになりますが、実際の政策策定の現場では、例えば政策の実行に伴って負担が重くなる経済主体があったり、そのような税金の導入を求める市民グループのようなものがあつたりする。机上の理論だけではなく、具体的な事例を重視して講義を進めていければと思っています。

**学生C**／講義の理解を深めるために、日ごろはどのようなことをしていけばいいですか。

**浅妻**／現代の政策課題に対するセンスを磨いてほしいと思います。その意味では、やはり新聞に目を通すなどして、時事問題にはよく触れることを心がけてほしいです。この講義でも、余裕があれば脱線して、時事問題の解説を行っていきたいのですが、なにぶん時間的にも精神的にも余裕がなくて。講義の冒頭で、先週講義したことについて今日こんな記事がありましたよ、といったことを話すこともあるのですが、あんまり反応がよくないので、もっとスムーズに脱線できるようにしたいと思います(笑)。

**学生B**／ときどき黒板の矢印がどこに向いているのか分からないことがあるんですけど…(笑)。

**浅妻**／たしかにそのへんは感じています…。図を書くことが多いことと関連していると思うのですが、もっとスキルアップをめざしていきたいです。講義への注文も新人にとっては大歓迎です。

**司会**／最後に、学生に対して望むことがあればお聞かせください。

**浅妻**／この講義に限ったことではありませんが、教員をもっと積極的に活用してほしいと思います。この大学は学生数も多く、経済政策も、どちらかというと大人数の講義ですが、例えば個別に自分の興味関心のある事項があれば、どんどん教員の研究室の扉をたたいてもらっていいんです。そしてもっといろいろな教員と話してください。いろいろな専門の教員がたくさんいるわけですから。私の研究室にも学生がどんどん訪ねてくれれば、私も一人前の教員かな、と思えるかもしれません。それから、これは学生だけではなく我々の問題でもあるのですが、学生のあいだにデジタルデバイスがあるのが気になります。補足的な事項の説明などは、インターネット等でも行えるので、一部で試みてはみたのですが、どうもうまくいきません。学生のデジタルデバイドをなくすようなソフト、ハード両面での環境が整えば、講義のIT化も考えていきたいと思っています。

(6月27日、経済政策論(1部)の授業終了後に取材させて頂きました。)

# 広がる活動の場 Play&Study

アイセック(AIESEC)北海道委員会委員長  
今 涼子(経営学科 3年)



**アイセックは世界的な組織であること、  
その中でアイセックジャパンはNPOの  
法人格を取得している組織と聞いていま  
すが、どのような組織なのでしょうか？**

アイセックが現在のよう組織化されたのは、1949年のことです。アイセックは主幹事業として海外研修生交換事業(海外インターンシップ事業)を行っています。これは、簡単に説明しますと、インターンシップを国内規模ではなくて海外規模で行うということです。海外の学生を自国の企業に受け入れ、自国の学生を海外企業に送り出すこと(相互交換)をしています。この事業とサポートアクティビティを通じて、インターン生に実務的な経験を与えると同時に、(アイセックの)メンバーやパートナーに対しても学習の機会を与えています。現在世界には84カ国、日本には24大学・地区委員会が存在し、活動しています。日本の加盟は1962年のことで、今年度設立40周年になりますが、より社会へインパクトを与えることのできる団体を目指して、昨年の夏にNPO法人の取得をしたんです。

**北海道委員会では  
日頃どんな活動をしているんですか？**

海外のアイセックと連絡をとって日本人の派遣企業を決定したり、道内の企業に訪問して、海外の優秀な研修生を受け入れていただけるように交渉したりしています。また、研修希望の学生のコンサルティングを行っています。そのほかにも勉強会(異文化や企業について、組織についてなど)を行っていたり、真面目なこともしていますが、他のサークルと同じく普段はメンバーと楽しくごはんをたべたり、遊びにいたりしています。

**その中で今さんはどのような活動を  
これまでしてきたんですか？**

1年次の前期までは日本人の研修生の派遣担当で、学生のコンサルティングを行っていました。後期から昨年度までは主に組織運営に携わっていて、情報システムと外務・財務担当をしていました。アイセックのWeb、広

報ツールの作成、あとは協賛していただいている複数の企業の方々に現状のご説明や財務上のアドバイスをいただきにいたり、充実していました。

**アイセックでこれまで活動してきて  
良かったこと、印象に残った出来事を  
教えてください。**

色々な人に出会えたことが自分にとってとてもプラスになったと思います。普通に大学生活を送っていたら出会えない仲間(道内・日本・世界に)と出会ったり、社会の第一線で活躍されている企業の方々、海外研修を希望している高い意識をもった学生…そういう方達とお話しすることで勉強になったし、いい刺激にもなりました。

印象に残った出来事としては、北海道地区のアイセックの改編ですね。それまであった2委員会を1つに合併させることはとても容易なことではなかったんですけど、ほぼゼロ・ベースに近い形から今の委員会組織を作れたこと、そういう時にコアメンバーとして現場にいたことはすごくいい経験になりました。あとは研修生に「アイセックの研修で人生変わりました。ありがとうございました。」といわれたときは嬉しかったです。「自分はホントに人の人生を左右することをしているんだ」と。

**自分自身この活動をやってきて  
成長したなと思う点はどんな点ですか？**

物事に対して色々な視点から見ることができるようになったと思います。状況判断が上手できるようになったというか。時間管理も上手になりました。性格も結構人見知りする方だったんですけど、どんな人とも話せるようになりました。両親にも「大学に入って自分らしさが出てきた」と言われて、成長したかな、と。きつと、自分に自信がついたことで前向きになったのだと思います。あとはスキルのなことで、ビジネス文書や企画書をは



じめとした公式文書、HTMLでWebも作れるようになりました。あとは目上の人と話す機会が多いので自然と敬語も話せるようになりました。おかげで毎日がとても楽しいし、日々常に成長に繋がっていると思います。

**自分自身の将来の目標は？  
この経験をどのように活かして行きたいと  
思っていますか？**

いい意味でインパクトを与えられる人間になろうというのが目標です。アイセックで自分の強みも分かったし、武器となるスキルも手に入れた。今もそう考えて活動してるんですけど、自分のアクションが他人だったり、社会だったりいい影響を与えることができたら、それによって何かが変わると思うし、変えることによって得られた達成感はすごく大きい。これからはもっともっと大きな場所でインパクトを与えたいし、実際にアイセックのOBの方達っていうのは社会に貢献していたり、インパクトを与えている方が非常に多いですね。そういう姿を見ると、非現実的かもしれませんが、自分も後に続けたいと考えてしまいます。

具体的にこういう会社に入って、こうしてというディレクションははっきりとはないんですけど、せっかくアイセックに入って、今年度は特に委員長という大任をいただいて活動しているので、そのことは絶対に活かしたいです。実際にアイセックで経験したことが大学の講義と繋がっていたり、講義でやったことが活かされたりしているんですね。ですから将来的に活かさないことはないと思います。最終的にアイセックにはなんらかの恩返しはしたいなと考えていて、どういう形になるかは判らないですけど、同じようにアイセックメンバーでよかったと感じてくれる人が増えてくれることを願っています。

連絡先: aiesec.hd@hotmail.com  
HP: <http://www.aiesec.jp/Hokkaido/>

## 顧問教員から

今さんをはじめ、アイセックのメンバーの皆さんと接して感じるのは、コミュニケーション能力と責任感が非常に高いということ。理事会議の場などでも、私や顧問の方々の質問に対して、ほぼ的確に答えてくれている点は非常に感心しています。またメンバーそれぞれが高い目標をもって活動に取り組んでいるということも非常に強く伝わってきます。理事としてというよりは、大学の教員として望むことですが、アイセックの活動には、ちょうど経営学科の授業などで学んだ知識の実践として活用できる側面もあると思うんです。受け入れ企業や賛助企業の開拓などは、企業でいえばまさにマーケティング(営業)活動ですからね。もちろん知識はそのまま役立つというよりは、それを実際に活用可能な知恵に転換する必要があります。知識を基に知恵を働かせることで日々の活動の仕方にも多様な発想が浮かんでくるでしょうし、それが自らのスキルアップにもつながってくると思います。

アイセック理事、経済学部経営学科 助教授(マーケティング担当) 伊藤友章

## 【ホームタウン】

生まれも育ちも岩手ですが、父の仕事の関係で県内を転々として過ごしました。その後、東京を経て現在の札幌での生活があります。ひとつところに腰を落ち着かせた感覚がないため、どこにいても自分の中では流れ者という意識が強いですね。実家がある盛岡は最近「三大麺どころ」すなわち「わんこそば」「盛岡冷麺」「じゃじゃ麺」の本場として、知る人ぞ知る麺王国となっています。札幌でも焼肉屋さんで「盛岡冷麺」と称するものは食べられますが、私はいまだに名前どおりのものを口にしたことがありません。食べたことがない方は、ぜひ本場・盛岡で味わうことをおすすめします。カルチャー・ショックに打ち震えてしまうことでしょう。



八代目 三流亭 菊ん馬を名乗る

## 【学生時代】

高校・大学を通じて、悶々としていましたねえ…。これとやってやりたいことも見つからず、大きな場を求めて行った東京もなんだか居場所がない感じで。ただ当時の社会情勢や世の中の流れに対して自分なりに反発を感じていたため、とにかく普段からたくさん本を読むことだけはしてましたね。このままではいけない、と。それは社会のみならず自分自身に対して発せられた言葉でもありました。バイトとサークルの忙しさにかまけて、これといった方向性も定まらずに、なんとなく1年2年と過ぎてゆく。そのくせ目の前の楽しみに心から身を委ねることもできない。いわばそのディレンマに苛まれていたわけです。

## 【研究者の道へ、大学院へ進学】

卒業当時は日本経済がバブルに沸いていた頃で、就職は完全な

売り手市場。私も早々に内定はもらっていましたが、このままそこそここのところ就職してそこそこの人生を送るんだろうなどとボンヤリ考えていると、しだいに立っていてもいられなくなってきました。こういうのは他人から見ればただのひねくれ者の発想なのかもしれませんが、今でも自分では普通+αの考え方で都合よく解釈しています。またなによりも「物書き」として自分を表現したい、物事の仕組みや社会の潮流を自分の言葉で新たに定式化したい、との強い思いがありました。中学生の頃から好きで読んでいた歴史小説の影響かもしれません。そんなことで、研究の道を志したのは自然の成り行きではあったわけです。大学院時代はまさに下積みといった感じの日々でしたが、それでも自分で決めた道を進んでいるんだという充実感は大きかったですね。問題はお金がないこと。バイトすれば研究時間がなく、研究すればお金がない、という悪循環にいつも悩まされてました。

## 【研究テーマ、これからの抱負】

現代は企業社会ともいわれるように、企業活動を中軸に様々な関係が構築・編成される社会です。ここにおいてマネジメントの果たすべき役割は単に自身の目的追求のみならず、社会目的にも対応したものでなければなりません。まさに「社会対応型経営」の実践こそが、現代企業の課題といえるでしょう。しかしながら従来の経営学では企業成果重視の実践論とその反動として「企業の社会的責任論」が対置されているだけで、それらを企業社会という統一した視点から客観的に位置づけ体系化する試みにはあまり関心が払われてきませんでした。いま取り組んでいる研究は、この企業社会という視点をさらに経営学的方法論的土台として理論的に構築することにあります。

また教育面では、来年度から、経営学科は経営学部へ独立することになっており、私もそちらの方に所属することになる予定です。IT技術の発展によって高度化する現代社会のなかで、人間の重要性がさらに増してきているといえます。そこでは知識だけでなく知恵が重要になってきます。経営学は、どのように行動して行くかという知恵を扱う学問だと思うのです。時代を見据えて行動していくという優れた知恵を有する人材を、新学部でも育成していきたいと考えています。

## 【私の履歴書】

春日 賢 助教授

担当講義 ● 経営学史

### PROFILE

- 1967年 岩手県に生まれる
- 1990年 中央大学商学部商業貿易学科卒業
- 1993年 立教大学大学院経済学研究科経済学専攻博士前期課程修了
- 1997年 中央大学大学院商学研究科商学専攻博士後期課程単位取得
- 1997年 北海学園大学経済学部 専任講師
- 1998年 北海学園大学経済学部 助教授  
～現在に至る

### 主な論文

- ・「企業者と株式会社—ヴェブレン企業社会の構図」『経済論集』第45巻第2号（北海学園大学経済学会・1997年）
- ・「パブリックミーンズにみる企業社会への視点」『経済論集』第47巻第2号（北海学園大学経済学会・1999年）
- ・「企業社会と産業社会—ドクターの制度的企業理解」『経済論集』第47巻第3号（北海学園大学経済学会・1999年）
- ・「企業社会とゆたかな社会—ガブレイスの制度的アプローチ」『経済論集』第48巻第1号（北海学園大学経済学会・2000年）
- ・「ポスト企業社会とマネジメント—ドクターのマネジメント・イデオロギー」『経済論集』第48巻第3・4号（北海学園大学経済学会・2001年）

### 現在の研究テーマ

企業・マネジメントを軸とした社会関係の経営学的研究



【学生諸君へ】

私自身ほめられた学生ではなかったので偉そうなお話はいえませんが、ただ単位を取ってなんとなく卒業していく学生を見送るのがツライですね。大学で学問の面白さをカジったわけでもなく、かといってほかにやりたいことがあるわけでもない。なんとか卒業できた、うまく就職できたと思ふ彼らの笑顔がいかにも見えなくて仕方がありません。じゃあ私はつい意識込んでしまうのですが、どうやらそれは「ありがた迷惑」でしかないようです。今の世の中、楽しいこうと思ったらいくらでもできますが、少し我慢して努力すればかけがえのない自分だけの宝物を手にもすることもできます。またそうしたみなさんの意欲に少しでも応えるべく、各先生方はいつでも待っています。まずは自分で動いてみてください。

S A T O S H I K A S U G A

## 【 どういう動機で大学に入学しましたか？ 】

私たちの時代は偏差値などはなかったから、何をやりたいか、どういう先生がいるか、それとやはり大学名で決める、ということでした。中学に生意気な生徒がいて、その影響で初歩的な唯物史観とか資本論入門とかをチョコチョコと読んでいた。ですから、経済学を金もうけの学問みたいに勘違いする人がいるけど、全く違う意味で高校の時から経済は大事なんだな、と思ってました。また、語学にも関心がありました。ソ連のスターリンが死んだ時、どうしてこんな文字で「スターリン」と読めるのだろう、とロシア語に興味をもち、中学3年生の時にロシア語文法の本を古本屋で買ってきたら、ドイツ語をやっている友達がいいたので、ライノリ意識で学習したもんです。そんなわけで東大と東京外大が志望校でした。

東大入学当時いわれたのは、教養学部では、近代経済学をやるかマルクス経済学をやるか、本郷(学部)に行くと、講座派か労農派か、また宇野派かそれ以外か、選択しなければならぬということです。当時の講義は、教養学部は二年間ビッチリやるけれど、経済学関係では、経済地理の飯塚浩二教授の講義に感銘を受けました。「地球儀を買いなさい、地図は北極点を真ん中に見ないで、よく分からないよ。日本が米ソ対立の真ん中にあると思ったらとんでもない、北極圏を挟んで米ソが対立し、日本はからめ手であって、小さな団子でアメリカについていくお供の犬だ」という言葉になるほどと思いました。また、日本の資本主義の特異なあり方について、納得のいく説明がありました。



ソ連時代のレニングラードを背景に

## 【 どんな学生時代でしたか？ 】

大学に入ってから、すごい学生がいるわけで、経済学部へ進学するには『資本論』を読んだかなきゃいけない、といっておどかすのです。私も3年生までには一応読みましたが、原文でアダム・スミスを読むとか、やろうと思うことはたくさんありました。しかし実際は挫折することが多かった。また「ソビエト研究会」というのに入り、一・二年中断していたのを再興しました。「研究」よりもロシア民謡を聞いたりロシア料理を食べたりでした。

2年のゼミでは、相原茂教授のところで『賃労働と資本』を原文で読み、3年から横山正彦教授(講座派で重農主義の研究者)のゼミに属し、宇野派と論争することが多かった。横山ゼミを選んだのは、当時概論で聞いた宇野派の説明がしっくりこなかったからですが、飯塚教授の授業にも一因がありました。ゼミでは『資本論』を読んでいました。要領がわからず、だらだらと報告してたら横山先生が出ていっちゃった、とか、かなり厳しかった。とにかく『資本論』の勉強が中心で、ノートなんかは今も持っています。学部の講義は、正直言ってあんまり授業に出なかったのですが、大塚久雄教授の講義は読切り推理小説のようで楽しめました。でも、学内は安保闘争に明け暮れていましたから、結構そっちに行っていました。国会前のデモは良く覚えています。国会に突入して、無期停学になり一年遅れて同じクラスに入ってきたのもいましたし、当時の世代は、国会前にいる方が大学にいるよりも多かったような時代です。やっぱり、みんな世の中のことを一生懸命考えてました。その後そういう学生運動は、若いのを中心にどんどん議論が単純化し、極端な方か要に勝っちゃったりして、最後はただの暴力集団になっちゃっ

たけど…。私はいわゆるノンポリに近かったが、それもまた一つの政治的立場だということも思い知らされました。

## 【 大学院に進んだのは？ 】

大学院に進むことを考えたのは、大学入学の年に、プラトンの『ソクラテスの弁明』を丹念に読んだクリントンというあだ名の高校の先生から、「君は大学院に残ったら」といわれたのが一つのきっかけです。当時は景気もよく、成績の良い者は官僚や大企業へと就職していきました。私は、成績も最優秀ではなく、上司におべっかを使うのもへただし、もう少し勉強したい、ということから3年生の頃から大学院は考えてました。

テーマについては、何をやるにも理論をしっかりと固めなければだめだ、といわれ、5年間は理論に専念しながらソ連のことも分析する、という研究生活になりました。理論研究のテーマは再生産論をえらび、土地制度史学会のお手伝いをするなかで山田盛太郎教授を紹介されました。当時専修大学に属しておられましたが、旧山田ゼミを中心とした研究会に参加させてもらい、報告もさせられました。こわい先生だと聞いていて、えらく緊張しました。でも私も図々しくつたですね。大学院生でありながら、十歳以上も上の先輩たちの中に入って研究会に参加したわけですから。

大学院の演習では古典を中心に『経済学批判序説』とか、スミスの『道徳情操論』やモーリス・ドップの論文を読んだり、スラフアの『商品による商品の生産』をやったりでした。また、ソ連からみてレーニンの理論についても研究し、ソ連それぞれの実態分析も少しずつ手がけてました。国際関係では、川田侃教授からも教えを受けました。

東大経済学部の助手に任用されましたが、この助手はスタッフとしてではなく三年で出るといふものでした。その後幸せにも法政大学に採用され、国民所得論を講義することになりました。今ではマクロの講義でしょうが、当時、「ケインズも少しやってくれませんか」ということでした。

## 【 社会科学研究所では？ 】

法政から東大社会科学研究所に転じてからは、あつという間の27年間でした。この間ずっとソ連を研究対象としてきましたが、考えてみると、二十世紀の世界を構成したのは、二度経験した世界大戦、70年代までずっと続いた植民地体制、それと社会主義体制の三つであり、国際関係を考える上で大事な要素だと思います。

これからは社会主義はいろんな形で登場してくるだろうと思いますが、あの社会主義はどの点で成果があつて、どの点でまずかつたのか、やりがいのある研究対象だと思っています。実際、研究所では大学院生しか教えないのですが、ソ連とか東ヨーロッパの社会経済研究を志す人が来ました。例えばソ連の'20年代から'70年代まで再生産論や投資効率論など貴重な論争があるし、そういつたいろいろなことを見直していく必要があると思います。しかしソ連が崩壊してから数年は、ソ連の経済構造を再生産論によって分析しようなどというのは時代遅れとされ、マクロ・ミクロやシステム分析へとなだれ込む成行でした。ロシアの「市場経済への移行」も一役かって、市場を万能とする議論が行き渡っていきました。だが現在のロシアの市場経済化は、再生産論や資本蓄積論が正しいことをもう一度示しているように思えます。今後もこの方向で研究を続けるつもりです。

いまロシアでは「公共経済改革」のかけ声のもと、住宅・公共料金の完全受益者負担が一挙に実現されようとしています。「社会主義の悪しき名残」といわれても、かつての制度を守ろうとする抵抗もあります。最近訪ねたチタのコンプレッサー工場では、女工たちの受け持ち職場が花や写真で飾られ、人間らしく働く場を守ろうしていました。人間はお金と効率だけでは豊かに生活しているとはいえない。しかし、「金を払ったのだから」を連発する日本人が多いのは少し悲しい。

## 【 私の履歴書 】

二 瓶 剛 男

教授

担当講義 ● 国際関係論

【学生諸君へ】

うちの学生は素直でまじめだけど、社会的な常識やルールを認識していないのかもしれないね。テレビにでるタレントのように授業中帽子をかぶったままのがいるけど、君はテレビに出てるんじゃないんだから私の話を聞くのなら帽子をぬげ、ということでは怒っちゃったですね。あまり他のことは怒りませんが…。あと、語学は話せるようになることが大事だ、というので会話学習に熱心だけど、でも、やはり大学では文章を読めるようになるのが基本なんじゃないのかな。論理的な思考力を身につけてほしいと思います。

それから感心するのは、授業にほんとはよく出てる。出てくるんだけど、出てるというだけで、しゃべったり、携帯でメールをやりとりしたり、真面目というが不真面目というか…。講義を聞かないのなら映画や演劇をみるとか、本を読むとか、その方がよほど良い。少し逆説的ですが、学生時代には「役に立たないこと」をしてほしい。「役にたつこと」は就職してから努力すれば間に合います。社会に出たら二度と読めない古典を読んでみる、スミスでもケインズでもマルクスでも、また自分の生き方をじっくり考えてみる、そのために時間があるんだから。

とにかく、偏差値などにとらわれず授業がつまんないなら出ない、図書館で他の人が見ないようなむずかしい本を読んでみよう、とか、もっと気概を持ってほしいですね。

### PROFILE

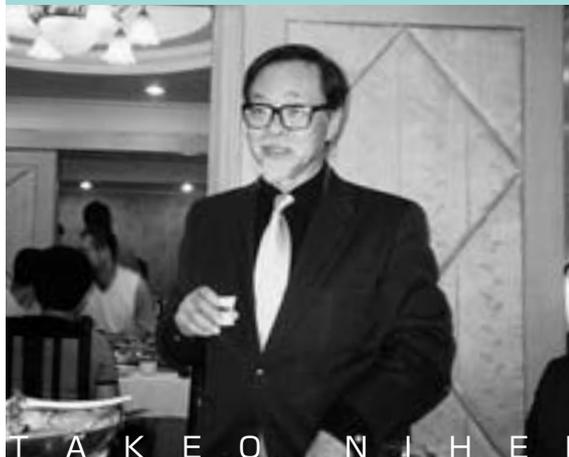
- 1944年 福島県に生まれる
- 1962年 東京大学経済学部経済学科卒業
- 1967年 同大学院 経済学研究科  
理論経済学・経済史学専攻博士課程退学
- 1970年 法政大学経済学部 助教授
- 1973年 東京大学社会科学研究所 助教授後教授
- 1999年 北海学園大学経済学部 教授  
～現在に至る

### 主な論文

- 「ウズベキスタン経済の現況—ロシア・カザフスタンとの比較—」『ロシア・ユーラシア経済調査資料』(ユーラシア研究所・1999年)
- 「プレオブラジエンスキーの「経済均衡分析」—「具体的資本主義」における「縮小再生産」の場合—」『北海学園大学経済論集』(北海学園大学経済学会・2001年)
- 「チタ州経済の現況と問題点」『ロシア・ユーラシア経済調査資料』(ユーラシア研究所・2002年)

### 現在の研究テーマ

再生産論と国民経済バランス論、旧ソ連構成諸国の経済構造



# 経済学部が変わります。

## 2003(平成15)年度新学部・新学科設置認可

### 申請中



[現在]

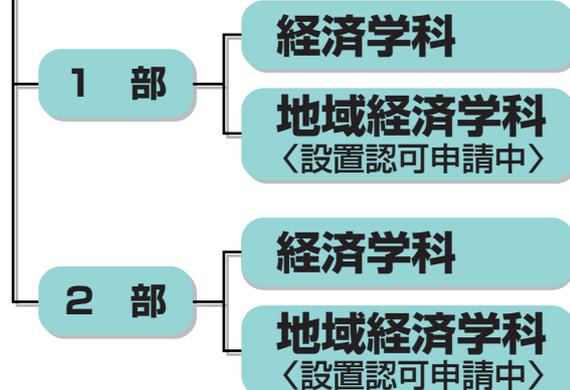
### 経済学部



[2003(平成15)年度新構想]

### 経済学部

●時代のキーワードは、自分たちの手による「地域づくり・街づくり」です。経済学部ではこの課題に応える「地域経済学科」の増設を認可申請中です。経済学部が50年にわたって培ってきた理論・歴史・政策分野での研究と結びつけながら、北海道をはじめ国外・国内の各地域で経験・研究を蓄積してきたスタッフのもとで経済学の新分野を学びます。また、2部には社会人特別入試制度を設けており、「社会人の再学習の場」「生涯学習の場」として、社会人は実践経験を生かした学習・研究が可能です。



お問い合わせは…

### 北海学園大学

(下記奥付住所、地下鉄東豊線「学園前」駅直結・札幌駅より6分)

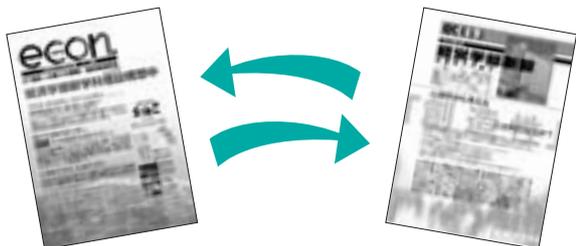
#### ●経済学部

Tel・FAX・e-mail下記奥付参照

#### ●入試部入試課

Tel.011-841-1161(代) Fax.011-824-3141  
テレホンサービス 011-841-0988

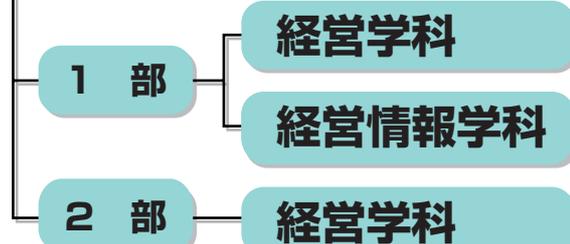
econ.別冊もご覧ください



### 経営学部

〈設置認可申請中〉

●IT革命とグローバル化の進展を背景に、企業や組織を取り巻く環境の大きな変化は、合理性、社会性ばかりでなく、人間性を備え、創造性豊かな人材を求めています。経営学部1部では、企業組織の合理的なマネジメントを実践することの出来る人材、組織の変革の論理を理解しそれを大胆に実行することの出来る人材、様々な視点から企業組織の課題を発見しそれを的確に解決する能力を有する人材、人間行動への理解を踏まえた情報処理能力を有する人材の養成を目指します。また経営学部2部では、社会人特別入試制度を設け、「社会人の再学習の場」ならびに「生涯学習の場」として位置付けられています。



econ. (エコノ) No.6 発行：北海学園大学経済学部 2002・夏

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1-40 TEL.011-841-1161(代) FAX.011-824-7729  
HP.http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp e-mail:admin-ec@econ.hokkai-s-u.ac.jp